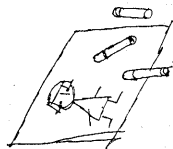


## 幼稚園の教師に望むもの

# 教師の創造性と幼児の創造性

(一)

飯 田 泰 造



創造という働きをただ、ものを作り出すことと考えるならば、鳥や昆虫でさえも秩序正しい巢をかけたたり、美しい形のものを作っているのを見る。しかしこれは自然への適応や陶汰はあっても、ただ親から受けついでものをそのままに繰り返しているに過ぎない体にくつついたことがらに属することであって、進歩も変革もないものであり、創造というに値しないであろう。

創造とは、進んで自らが新しい経験をすることをいっているのであって、人間の営みには、今日より明日とよりよい生活に進んでいく希望があり、進んでそれへの努力を払っていく姿がなければならぬ。そこに知恵をしばり、くふうをし、言葉を考え、さらに文字をつくり出したり、美しい数々の美術遺産を生み出したりして来た人間の文化が、不可能を可能にし、その生活をより豊かなものにして来たわけであるが、この過程を考えてみる時、創造の営みをそこに見出すのである。

そして高い文化が築かれた時代には、きっと豊かな創造性が保たれてきたことを見て来た。

### ★創造性の教育と教師の位置

幼児の成長を見ると、そこには創造の働きがあり、人格形成として創造性の芽を引き出して培養していくことを考えていかねばならない。

このことはわが国においても戦中は「科学する心」とか「創意工夫」という合言葉で教育の中に考えられてはいたものの、幼児教育において創造性を培っていくことが、極めて大切であると叫ばれるようになったのは終戦後のことである。華々しい勢で拡がっていった創造主義の美術教育も、それぞれの時期においての大切な役割りを果たして来たことは事実であるが、幼児に全き創造性を来たらせるものとなったであろうか。

むしろ創造性ということが、切実に要求されるようになったの

はごく近年になって、科学技術のいちじるしい発展がもたらした才能開発の要請から来る教育問題として大きく浮かび上がって来たものではなからうかと考える。

それならば、今日の要求はただ感覚的芸術的創造性ばかりでなく、くふうや発明を来たらせる知的思考的創造性の芽を育てるものとして迎えられているように思う。

しかしながら幼児期をその発達の様相から考えてみると、これほど創造性の旺盛な時期はないのであって、しばしば「学校に入ると幼児時代のように想像の翼をつけて空を飛びまわることができなくなる」といわれているゆえんであり、だからこそ幼児教育の時期において、新しい時代に要求される創造的な人間像の土台をしっかりと築いておかねばならないとも考えられるのである。

しかし、幼児期は、絵を描いたり、ものを形づくったり、音楽リズムや劇のような芸術的創造的活動を、くふうしたり考え出したり発明発見などに至る知的創造活動とは分離されていない総合的な未分化な時期であって、それらすべての活動を活発にすること——実は子どもの遊びの中で豊富な経験をさせることと、それを創造的に方向づけていくことがこの要請に答える仕事だといえることができる。

さてこのことも、具体的な問題となってくると、いろいろな要素が考えられ、要素づけていく教師自身の創造性がきわめて大切な役割をもつことに行き当たる。

教師は教育という仕事の中で、子どもとどのようなかわりを持っていかを考へ、その役割りと働きについて常に見つめてみることが大切であるが、創造性ということでは考へるならば、教師が保育を創造しているか、ということであろう。

それはどのようなことか。

★子どもとともに自らを高めていくこと

まず、子どもの創造性を認識し、尊重することが挙げられる。このことは、子どもは教師があまりに熱心になり過ぎて子どもを引っぱっていかうとするやむをざる反対に創造的な活動の軌道をはずれてしまうこともあるので、教師は子どもをじっくり見つめると同時に、ともに創造的でありたいということである。それは子どもほど創造性の盛なものはないのであって、しばしば教師は子どもから教えられるものである。教師は子どもとともに進んでいかねばならないことになる。

確かに教師はいつも一歩高い所から子どもを俯瞰している心が必要であろう（観察し、洞察し、科学する）。適時称賛を与えたり、できるだけ目につかない方法で子どもの遊びを組織していったらねばならない。しかし同時に、子どもの目より高い所に構えているのでなく、子どもと同じ目の高さに位置してみると大切である。ということは、子どもの視野でものを見、子どもとともに生きてみるということ、子どもと一緒に驚いたり、疑問をもったり、また発見してみようとするものが大

切である。しかしそれは決してレベルを下げるということではない。教師は常に自分を磨いていかねばならない。ここ数年の間、幼稚園の教師の不足が、教師の質的低下を来たらせているむきもあつた。教師自身高まつていこうとする努力が不足していたようにも思う（これは教師養成や、社会問題もからんでいよう）。創造性においても当然高まつていかねばなるまい。それは一人一人に適したものがあろう。それを見出して磨いていく努力が必要であるように思う。

絵についていうならば、かつて「教師は絵は描けなくともよい、子どもの心を知り、遊べればよい、指導にあたっては、描けることがかえって災いとなる」というように教えられたむきもあつたが、それも確かに一理ある言ではあるが、これをとりでにして教師が絵を描いてみようとする心も、その創造の喜びも楽しみもまた努力することの快感をも捨て去ってしまったのでは、到底子どもとともに生き、創造を味わうことはできないであらう。

音楽もそうであらう。決してピアノがよく弾けるとか、歌がじょうずにうたえるということに限らずに、音楽を心から楽しみ得る者でなければ、子どもとともに音楽を創造的に味わうことができず、適格ではないであらう。

子どもの、また教師の身のまわりにある素材は限りのない拡がりを持っているのに、われわれの目が狭くなっていることはないであらうか。それを精進して見出す努力をし、そこに喜びを感じ

とつてより創造的な生活を営む者となつていきたいものである。そこで一つ考えられることは……。

#### ★タレントということ

である。確かに天分を持った者はある。それはとても素晴らしいことであり、たまたものには違いない。教師の天分が子どもによい影響を与えていくことは考えられる。しかしそれならばそのような者でなければ教師としての資質に欠けるであらうか？……私はこのように思う。むしろ一人一人は「自分はどのようなたまたものを持ち合わせていない、だから高まつていこうと努力し向上していく……その努力する心構えが子どもに伝わっていくことが大きいのではなからうか」と。

だから物ごとを不思議だと思つてみる心を習慣づけていくとか、ぼんやり見ていないで、そこいらにも素晴らしいものや、あるいは美しいものがひそんでいることを見出そうと努めてみること……教師がそのような心がけを持ち続けていくことが、幼児の創造性の芽を培つていく大切な素地となるのではなからうかと考へる。

また、しばしば幼児教育において大切な環境設定について考えてみるならば、そこで教師は大いに保育に創造性をもりこむことが可能である。

創造性を教育したいという願いは、実は教えることのできないものであつて、子どもの心の中に自発的に育つていくものなので

あるから、十分芽の出やすい環境を設定しておいてやるのが極めて大切なことに違いない。

そこでの教師の役目はとても大きい。

創造的な環境の設定が切にのぞまれる。それはどのようなことであるか。

教師自身にしても自分に最も適した創造性を高めていくことができる(領域)が考えられるであろう。子どもの創造性を高めていくことができるのは、(たとえば)「絵画製作」と決めてかかる必要はないのであって、それ(絵画製作)によつて、ものぞめるといふものであろう。銘々が主体的にそれを見つけ、高めていく努力をしなければならない。

★創造は模倣をのりこえて……

先日ある音楽リズムの先達と教諭たちとの話し合いの時に、一教諭が「子どもの前に立つて先生がリズム表現をして見せることは、子どもがそれを模倣し、そこからパターンができてしまうのが心配でやることを躊躇してしまふ。そうかといって、やらないうと子どもが動き出さない」という発言をした。これに対してその先達が「それはその先生自身が音楽をほんとうに楽しんでない、自信をもって確固たる態度で自分が音楽の中に溶け込んで表現をしているならば模倣に終わるような心配はいらない」という言葉を聞いた。ほんとうにそうだと思ひ、そこに創造の姿を見るのである。

教師は常に子どもと一緒に創造をし、ひらたい言葉でいうならば、夢を持って生きていたいものである。しかしそこには努力も勇気も必要とされる。また、タイミングをとらえるということもとても大切なことである。きつかけをはずしてしまうと折角の創造的な発想や動作もそれが創造的なものとして伝わっていないことがある。驚ろきや疑問や発見があつたら、教師もタイミングよくそれを捉えてそこから表現にすすめていこう。それは緻密に、誠実に。そして表現することによつてまた新たな発見や驚ろきを来たすと考えられる。

そしてこの場合にも教師は動機づけに大きな役割りを果たすものである。

教師は子どもを連想に導いていくことによつて、子どもの心の中のイメージを浮かび上がらせ、拡げていけるであろう。それはいろいろな方法が考えられる。

「絵をつくり出すものは何か……それはあらゆるものが詩になる時だ」とイギリスの女流美術教育の先達マリアン・リチャードソンはいつている。(『愛の美術教師』)

そこではリチャードソンは「私たちは美を狩り出しに行く、そこで私たちは歌になる、ような調和のとれた形を見つけて家に帰る……そして詩をもって描写を与え、彼らの思いついたままを描かせた」といつて教師たちが詩人であることを奨めて<sup>す</sup>いるが、ここにも一つの<sup>す</sup>だてを見出すことができる。

教師は詩人であり、芸術家でもあり、また、科学者であらねばならない。

詩人とは、うっかりすると見過してしまふようなものの中にも調和や統一や秩序を見出して最も簡潔なことばでそれをうたい上げていく者であろう。

芸術家とは平凡なものの中にも美を見つけ出していく者であろう。

科学者とはニュートンのように何でもないリンゴの落下にも目をとめて、その中に宇宙の真理を見ぬこうと努力しているのであって、それは別個にとりたてていう人（や職業）ではなく、実は自分自身であると知らねばならない。

こうした創造的な教師の生き方や心構えが、子どもが創造的に育っていく一つの方途であって、保育を創造していく者の構えではなからうかと考える。

#### ★保育を創造する教師会に……

もう一つ加えておきたいことは、幼稚園は大よその場合、数人の教師によって構成されている。つまり教師会を持っているが、この教師会が創造的であるかどうかはその幼稚園の創造性の活動源となるのではないだろうかということである。

もちろん上述のように個々の教師が創造的であることはまず大切であるが、教師会が創造的であることがもう一つの重要な力となる。

教師は保育を任せられ担当しているから保育室では一城の主でいろいろなことを考え、実践しているのに、教師会となると依存的態度の寄り集まりとなったり、一部の権威に盲目的であったり、よりかかる空気が出て来たりすることは戒めなければならぬ。

互いに保育室で出てくる問題を出しあい、ぶつけ合って更に創造的、建設的な意見を出しあってこそしっかりと保育が創造されるであろう。

そこでは努めて自分を表現する努力を積んでいくべきであるとともに、他の意見を傾聴し、ほんとうに教師会が話しあいの場となる時、教師の相互が次第にきたえられていくであろう。

教師が一人一人の子どもを正しくみつめて捉え、ねらいをしっかり立てて保育をし、それを評価する―実は自分の仕事を反省する態度が確立された時、創造性も高められていくのでなからうか。

教師の一人一人は教育の主体なのだから、とかくリーダーの影により沿ってその命令に従ってやっていく安易な行き方を極力排して、まずは自らが保育を創造していく意気込みを持ちたいものである。

教師会がそのような相互の高まりのための場となるために互いに影響を与えあいつつ、自分たちに与えられている課題に直面し、それに取り組んでいける者となるように励まし合い、助言しあうよう努めることも大切なことと思われるのである。